

(そのとき、)ファリサイ派の人々が近寄って、「夫が妻を離縁することは、律法に適っているでしょうか」と尋ねた。イエスを試そうとしたのである。イエスは、「モーセはあなたたちに何と命じたか」と問い返された。彼らは、「モーセは、離縁状を書いて離縁することを許しました」と言った。イエスは言われた。「あなたたちの心が頑固なので、このような掟をモーセは書いたのだ。しかし、天地創造の初めから、神は人を男と女とお造りになった。それゆえ、人は父母を離れてその妻と結ばれ、二人は一体となる。だから二人はもはや別々ではなく、一体である。従って、神が結び合わせてくださったものを、人は離してはならない。」

-マルコ9章-

与える愛

司祭叙階間もなくして、釜ヶ崎に拠点を置いて活動を始めた頃、時々言われました。「神父さんはどうして小教区の信者を置いて釜ヶ崎なんかに行くんですか？」と。99匹を荒れ野に残して、迷った一匹を捜しに行くイエスの心をたどりながら答えました。「99匹には友達のいる幸せがあり、一匹にされた羊は、たとえ自業自得でも、彼の不幸はこの世に誰一人、友のいない孤独なのです」と答えて仕事をつづけました。

そんなあるパトロールの夜、警察署の裏で寝ているおじさんに声を掛けたとき、びっくりして目を覚ましたおじさんは、おびえた様子で私を見つめ、「あんたキリストか」と言いました。私は「はい、キリスト教の者ですよ」と応えて「おにぎり」を差し出すと、ほっとした様子になって、それからポツンといった言葉が私に忘れられない言葉となりました。「人間、痛いとか、かゆいとかなら、そこに手をやれば何とかなるが、寂しいという事だけはどうすることもできません」この言葉を遺して、おじさんはまもなく亡くなって逝った一人でした。

私たちは関係性の中で神から創造された人間です。訳あって人を避け、孤独を余儀なくされた寂しい人間にとって、救いは「神の憐み」だけです。主が彼を訪ねるのは非を責めるためでは決してありません。命は独りでは、「人」として生きられないから、人生を終える前に、必要とされて愛された体験を与えるためでしょう。死を待つ家で一人一人を看取られたマザー・テレサは、その主を生きた聖人でした。



不完全な人間が、相手の不足を補うために二人は一体となる(創1.18)のです。結婚は“あなたの幸せのためにどうぞ私を自由にお使いください”と互いが相手に自分を捧げることを決心することです。自分のためであるなら、“自分の不幸はみんなお前のせいだ”と相手に責任転嫁し、破たんを招くばかりでしょう。

愛された子どもは、愛することが喜びになる大人になり、愛することが喜びである者同士が結ばれて二人は至福を味わいます。そこから生まれた子供は、夫婦の愛情のおこぼ

れで育つといわれるのです。関係性を成り立たせているのは「与える愛」だけなのです。神様が創造されたとき、命を最も貧しく造られたのは、命は愛されることによって、人間になれるためです。愛されないで育った人は、すべてに愛を求めて自分中心になりがちですが、求める愛は満たされず、キリストに出会うと、自我に死んで「与える愛」で聖霊の満たしを体験するでしょう。